

「パラダイム」とその周辺(4)

JDA理事 安藤温敏

3 その他のパラダイム (続き)

3-2 仮説検証パラダイム

今回は、仮説検証パラダイムについての解説です。ディベート甲子園ルールの枠内でディベートしている限りは、このパラダイムに遭遇することはまず無いでしょうが、頭の体操と思って読んでください。

3-2-1 仮説検証パラダイムの簡単な説明

これまで見てきた、政策形成パラダイムは国会などでの政策決定、定常争点パラダイムは刑事裁判、をモデルにしていました。仮説検証パラダイムのモデルは、科学の世界における仮説検証です。

例えば、「地球はほぼ球形である」とか「全ての整数は逆数を持つ」といった「仮説」に対して、それが真か偽か(ちなみに、最初の仮説は真、後の仮説は偽となります)を検証する過程をディベートに適用しよう、というものです。

3-2-2 仮説検証パラダイムにおける、論題とメリットの関係

仮説検証パラダイムにおいては、メリットは、論題が真であることを証明するための論拠として扱われます。先ほど挙げた例を使うならば、「地球がほぼ球形である」ということを証明するためには、「月に映った地球の影が丸い」といった論拠を示します。この論拠にあたるものがメリットとなります。

また、仮説検証パラダイムにおいて、肯定側は、メリットを出し、そのメリットがプランから導かれること(これはいわゆる発生過程に相当します)だけではなくて、論題以外にそのメリットを生じる別のプランが存在しないこと、すなわち、論題とメリットに一对一の関係(これを「必要十分の関係」と言ったりします)があることも証明しなければなりません。先ほどの地球の例でいうならば、「月に映った影が丸いのは、地球が球形だからではなく、円盤形状(円錐や円柱形状でも良いです)だからかも知れない」という疑いを抱かせてはいけません。そのため、さらに「月

に映る地球の影は、地球が自転してもなお丸い」といったことを言う必要があるわけです。

もう一つの「全ての整数は逆数を持つ」という例については、肯定側は「1、2、…100、…」などといった、整数を具体的に挙げていき、どれを取っても逆数(1、1/2、…1/100、…)が存在する、という論を張るわけですが、ここで否定側が一つの反例「0は逆数を持たない」ということを証明した時点で、それまでの肯定側の苦労もむなしく、この論題は偽である、という結論に達することになります。

こういった「地球は実は球形ではなくて円盤型かも知れない」「0は整数であるにもかかわらず、逆数を持たない」といった例は、仮説検証パラダイムの世界では「対抗仮説」と呼ばれます。否定側は、こうした対抗仮説をいくつ出しても良く、これら対抗仮説が互いに矛盾しても構いません。対抗仮説は、否定側の取るべき立場ではなく、あくまで「仮説」の一つに過ぎず、また現実世界における仮説検証でも、反例となりそうなケースをたくさん挙げるのは、良く行われることだからです。

今年のディベート甲子園高校論題を例にとって考えて見ましょう。「日本は18歳以上の国民に選挙権・被選挙権を認めるべきである。是か否か。」という論題の下で議論するにあたり、肯定側が「若者向けの政策の実現」と「政治参加の拡大」というメリットを挙げて、論題を肯定しようとしたとき、否定側は、

- ① 選挙権・被選挙権を与える年齢を「18歳以上」ではなく、「16歳以上」とする。
- ② 選挙「権」でなく、投票「義務」を、18歳以上の国民に課す。
- ③ 18歳、19歳には選挙権・被選挙権を認めず、代わりに65歳以上の国民の選挙権・被選挙権を剥奪する。

などといった、対抗仮説をぶつけ、これらの対抗仮説でも、肯定側が主張するのと同じメリットが得られる、と論じることによって、論題が真ではない、とすることができます。

例えば、「若者向けの政策が実現する」というメリットは、対抗仮説①や③でも十分実現できるはずですし、「政治意識の向上」というメリットであれば、②の対抗仮説の方が有効である、という議論が可能でしょう。そうだとすれば、論題とメリットの間には一対一の関係があるとは言えず、否定側の勝利となります。

ちなみに、「現状」は、これら対抗仮説の一つとみなされ、否定側がなにも対抗仮説を出さなかった場合は、現状とプランを比較することによって、現状でもメリットが得られるかどうかを判定することになります（この場合は、私たちが通常行っているディベートに近い形となります）。

3-2-3 仮説検証パラダイムの下で有効な議論とそうでない議論

上記の内容から、仮説検証パラダイムの下では対抗仮説をたくさん出すことが有効な戦略であるのは明らかですが、その他にも、これまで見てきた議論が有効かどうかを考察してみます。

1) 論題に固有なメリット・デメリット

あるプランが、そのプランに固有なメリットを持つということは、そのほかの対抗仮説によっては得られないメリットがある、ということであり、このことは肯定側に投票する大きな理由となります。

また、デメリットは、メリットを否定することにより、論題が真であると証明する根拠がない、ということを示す議論として扱われます。一般的には、否定側がデメリットを使って論題を否定しようとする場合は、政策形成パラダイムと同様、通常の特メリット・デメリット比較により、メリットと同等以上のデメリットが発生する場合に否定側の勝利とすることになると思います。

2) メリットに対する疑問を呈する議論

単なる疑問を提示する議論であっても、論題が真であることに疑いを抱かせる程度のものであれば、否定側勝利となる可能性があります。

これは、現実の仮説検証において、真であると証明されるまでは、その仮説が偽であると仮定して話を進める、という慣習に基づいている、とされています。

3) 現状でプランが取られる、という議論

この議論については、いくつかの理論書を

読んでみても、特に言及は無かったのですが、おそらくは仮説検証パラダイムにおいてもあまり有効な議論とは言えなさそうです。

仮説検証パラダイムにおいて審査員が判断するのは、あくまで論題の真偽であって、論題と現状の関係には興味がありません。

また、仮に現状が肯定側のプランと同じであったとしても、否定側は他にいくらかでも対抗仮説を出せるので、ディベートの行方にはほとんど影響がないと思われます。

そのほか、仮説検証パラダイムを語るによく話題になる議論として、カウンターワラントというものがありますが、現在のディベート甲子園論題は、プランと論題がほぼ一致しており、カウンターワラントという概念の重要性は低いと思われるので、ここでは言及しません。

3-2-4 仮説検証パラダイムのメリット・デメリット

以上のように、仮説検証パラダイムの考え方は、政策形成パラダイムや定常争点パラダイムとはかなり異なります。このような考え方をディベートに取り入れるメリット・デメリットは何でしょうか。

まずデメリットから述べると、一つ目に、「政策論題のディベートに仮説検証パラダイムの考え方はふさわしくない」ということが言えると思います。通常政策を取るかどうかを決定する際に、このパラダイムで言われているような「厳密な」検証をしていたら、何もできなくなってしまう可能性が高いです。

また、上でも見たように、否定側は、様々な対抗仮説をできるだけたくさん出すことによって、たいていの試合では容易に勝つことができしまい、否定側に圧倒的に有利になってしまう点も問題だと思います。

逆にメリットは、仮説検証パラダイムについての考察をきっかけとして、ディベート理論が大きく発展したこと、政策論題以外の論題（例えば価値論題など）を用いたディベートには、政策形成パラダイムより適切なパラダイムとなる可能性があることが挙げられます。ディベート甲子園の世界では実際の試合で出てくることはないと思いますが、こうした考え方が、と知っていれば、ディベート理論や議論の構造についての理解も深まると思います。